琉球大学学術リポジトリ

阪巻・宝玲文庫の蔵書印

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学附属図書館
	公開日: 2017-05-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 崎原, 綾乃, Sakihara, Ayano
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36634

2015.12.16(水)　阪巻・宝玲文庫デジタル化プロジェクト研究報告

阪巻・宝玲文庫の蔵書印

Ownership Stamps of the Sakamaki/Hawley Collection

琉球大学附属図書館 University of the Ryukyus Library

崎原綾乃　Ayano Sakihara

１　阪巻・宝玲文庫の蔵書印

書籍の価値は、その内容、本という形態、受容の歴史によって形成されていると考えられる。阪巻・宝玲文庫の蔵書は、長い歳月の間に多くの人の手を経て集められた膨大なコレクションである。このコレクションは善本が多く、価値が高いことがよく知られている。しかし、それぞれの書籍を買った年代や金額、なぜこれを買ったのか、というような詳細なことはほとんどが現在では分からない。幸い、書籍の旧所蔵者達がいて、それぞれに蔵書印を押している。蔵書印から、個々の書籍がどんな人物から移動してきたものかを知ることができる。

阪巻・宝玲文庫の所有者であったフランク･ホーレーと阪巻駿三は、ほとんどの蔵書に自分の蔵書印を押印しているが、その蔵書印は複数ある。本発表では、阪巻・宝玲文庫のコレクションに押されている蔵書印について述べる。蔵書印からコレクションの旧蔵者達を調べることで、阪巻・宝玲文庫がどのような旧蔵者から集められているのかを述べたい。

琉球大学附属図書館では、石垣の頭職であった宮良家の宮良殿内文庫や伊波普猷文庫などを所有している。しかしその中に蔵書印はほとんどみられない。琉球・沖縄では、自分の所有古文書に所有の証として押印することがあまり見られない。沖縄の古書店でも店の蔵書印を押すことはまずない。そのため沖縄県内で書かれ、保管されてきた古文書類からは、蔵書印で所有者を追跡できない傾向にある。しかし阪巻・宝玲文庫は、ほぼ全てになんらかの旧蔵者の蔵書印があり、旧蔵者の情報がわかる。これは、コレクション全体から阪巻とホーレーのコレクション意図を探るにはよいものである。しかし押印のみで誰の印なのかが分からないものも多いことから、それらを調査した。

ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館が所蔵している阪巻・宝玲文庫は、全部で 902 件[1]である。そのうち、琉球大学附属図書館とハワイ大学マノア校とのプロジェクトでデジタル撮影、解説、翻刻、英訳などを付したのは、そのうちの 220 件(実質 735 件)である。

今回は、阪巻・宝玲文庫の各文書に押された蔵書印に注目し、そこから収集の特徴や旧蔵者の情報を調査した。ただし、琉球大学附属図書館が撮影をした資料のみである。本論中に蔵書印などの印面を画像で挿入しているが、ハワイ大学で撮影された画像データによって確認しているため、印の実際の寸法を計測していない。また引用の画像の縮尺は任意であり、実際の印の大きさを示すものではないことも付記しておく。

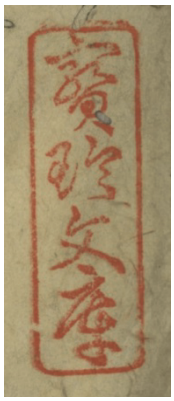
２　蔵書印の種類

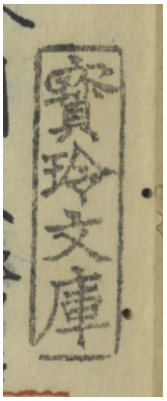
２－１　フランク・ホーレーの蔵書印

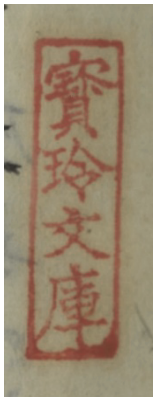
フランク・ホーレーの蔵書印は、4 種類あった[2]と言われている。漢字楷書体が二つ、漢字草書体が一つ、仮名草書体が一つである。漢字楷書体は、朱肉は赤と黒の二種類の朱肉が使われている。印と朱肉の色の組み合わせによって、何らかの意味づけをしているのではないかと思われたが、一貫した法則などは私は見付けることができなかった。そのため、押印の法則があるとは断定できない。

私が調査した範囲の古文書類では、ホーレーの蔵書印は 3 種類確認できた。漢字楷書体が二つ、漢字草書体が一つである。仮名草書体のタイプは、私の調査した古文書からは確認できなかった。

蔵書印 1[3]　**蔵書印 2[4]**　**蔵書印 3[5]**　**蔵書印 4**



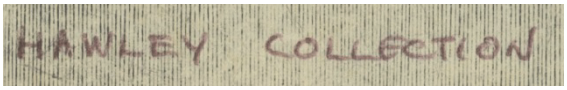




蔵書印 1 は、黒色、朱色の 2 色のパターンがある。蔵書印 2 と蔵書印 3 は、そっくりに見えるが微妙に印面が異なっている。

押印場所は、基本的に冒頭で、タイトルや本文にかからないように押されていることが多い。まれに隠し印のように古文書の途中のページに押されていることもある。押印は鮮明であることが多い。なお、ホーレーが蔵書印を押していない古文書もいくつもある。また、ホーレーのこれらの印鑑は、現在どこに所蔵されているか不明である。今回確認できなかったホーレーの蔵書印は、草書体の蔵書印 4[6]である。

押印ではなく手書きサインもあった。HW479 c -2『大日本国細図』には蔵書印がなく、手書きで「HAWLEY COLLECTION」と赤色の筆記具で書かれている。ただし、誰がこの文字を書いたか未詳である。書いたのはホーレーではない可能性もある。



〈「HAWLEY COLLECTION」〉

ホーレーは、蔵書票も使用していた[7]が、琉球大学附属図書館が阪巻・宝玲文庫をデジタル化した範囲では確認できなかった。

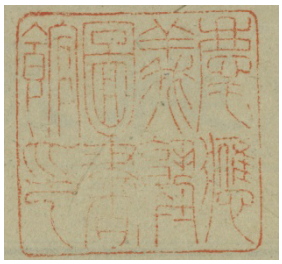
今回調査した古文書に押印がなかったので、阪巻・宝玲文庫内の阪巻駿三蔵書印については本論で詳細は取り上げないが、阪巻・宝玲文庫には、阪巻の蔵書印も随所に見られる。阪巻の印は、英語、日本語など 5 種類を確認している。角印 2 種（印面は[阪巻蔵書][阪巻駿三]）、丸印 1 種（印面[阪巻]）、縦印 1 種（印面[阪巻駿三]）、横英語印 1 種［Shunzo Sakamaki］の 5 種である。それらの押印箇所は、本の天、地、小口などにも押されるが、ホーレーはそのような押しかたはほとんどしない。

横山學は、ホーレーが蔵書印を押すようになった経緯について以下のように述べている。「ホーレー氏は書物を大切に思う故に自分の書物に蔵書印を押すことを嫌っていましたが、

友人のグーリック博士に勧められて押印するようになりました。また、蔵書印の印文と書庫の上部に掲げられていた「宝玲文庫」の篇額の文字は、そのグーリック博士の手になる物」[8]とのことである。

２－２　旧蔵者の蔵書印

旧蔵者の蔵書印はほとんどの古文書に押されていたので、印面から所有者を特定する作業を行った。一つの古文書で複数の蔵書印が押された書物もある。阪巻・宝玲文庫の古文書類に最も多く押されていた蔵書印は、慶應義塾図書館の蔵書印「慶應義塾図書館印」である。これは、ホーレーが戦前に収集した１万７千冊の資料が、敵産管理法により「敵産図書」として処分され、三井信託を通じ慶應義塾大学が購入、三田の書庫に保管された時に慶應義塾図書館が押したものである。戦後、戦災の焼失を免れた約 9,300 冊がホーレーに返還された。そのため、阪巻・宝玲文庫では一番多く押印された蔵書印である。左の慶應義塾図書館の蔵書印は、HW477『沖縄県管内全図』に押印されていたものである。綺麗に押印されたものよりも、やや荒く押印されてかすれがあるものも多い。慶應義塾図書館の印は、古文書の文字の上にもかぶせるように押されていることが多いのも押印の特徴のひとつである。



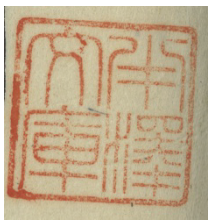
戦後もホーレーは次々と蔵書を増やしたが、昭和 20 年代後半から蔵書は売りに出された。五山版(約 70 種)は天理図書館が購入した。ホーレーの没後、入札会が行われ、1 万冊が競売に付されて蔵書は散逸した。その中で、和紙関係文献 431 点は天理図書館、琉球関係文献 936 点はハワイ大学が買い上げて蔵書としている。国立国会図書館は、古活字版約 10 点などを所蔵している。文人や為政者の印も多いが、誰の印か分からない蔵書印もある。

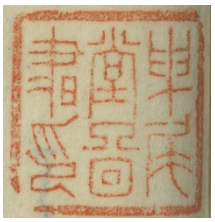
蔵書印の事例を著名人や名のあるコレクションを中心に見てみたい。左記は、HW441『琉球紀事』の「鈴屋之印」。江戸時代の国学者である本居宣長の印である。「鈴屋」は本居が自宅に付けた屋号である。この印は私が調査した中では、この書物にのみ押印されていた。

〈「鈴屋之印」〉　　〈「献英楼図書記」〉

右の蔵書印は、HW442『寛政二年八年琉球人来聘』に押された田安徳川家の三代斉匡(なりまさ)の「献英楼図書記」という印である。

〈「半澤文庫」〉　〈「曳尾堂図書印」〉



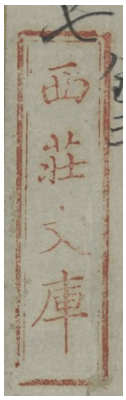


左の二つの印は、HW464-ｃ1『琉球奇譚』に押された「半澤文庫」「曳尾堂(えいびどう)図書印」という蔵書印である。「半澤文庫」は、明治時代に山形の村山地方漆山の大地主であった半沢久次郎の印である。半沢は１万点を超え

る蔵書の持ち主として有名であったが、蔵書は戦後に農地解放で散逸している。「曳尾堂図書印」の蔵書印は本来は江戸時代後期の豪農・儒学者熊阪台州(1739-1803)の曳尾堂文庫の印である。曳尾堂文庫は幕末から明治ごろにかけて半沢へ所有が移った。したがって「曳尾堂図書印」は熊阪が押印したように見えるが、高橋章則によれば「半沢氏が熊阪氏の蔵書印「曳尾堂図書印」を襲用し捺印していた」[9]。また、『琉球奇譚』は熊阪の死後の 1832 年に刊行されているため、熊坂が購入したものではない。つまり印鑑を引き継いだ半沢が押印したものである可能性が高い。

HW447『琉球人来朝記』に押印された「根津文庫」の蔵書印は、森尹祥(もりまさよし)の印である。森は 18 世紀の江戸の幕臣・書家である。

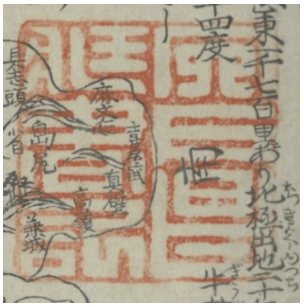
HW735『御膳本草　(中城本)』には 3 つの蔵書印が押されていた。「中城御殿」「宝玲文庫」「月明荘」である。「中城御殿」の押印は、琉球の中城御殿(世子殿)の印である。琉球国王の世子の文庫であったことを示すもので、これが押印された本は善本である。「月明荘」については後述するが、これらが押印されていることで、この書籍が貴重な善本であることが十分に分かる。なお、「中城御殿」の押印は、私が調べた範囲では、この 1 点しか確認できなかった。那覇市歴史博物館所蔵の国宝尚家文書の中には、この押印がいくつか確認できる。



HW592『定慧円明国師虚白録』、HW726『大島筆記』、HW741『琉球神道記』は、「西荘文庫」の押印がある。小津桂窓(おずけいそう)の印である。小津家は京阪と江戸にも出店した商家である。小津の印はほかにもう一つ確認できた。HW592『定慧円明国師虚白録』三の裏表紙には、「桂窓」の印があった。

HW448『琉球人行列記』、HW455『天保三壬辰年琉球人参府之節勤方書留』、HW460-C2『琉球入貢紀略』、HW574『琉球詩録』、HW631『古実方答』などには、「巌松堂古典部波多野扱斯書」の蔵書印があった。HW460-C2『琉球入貢紀略』には「古典狂巌重」という緑色の押印もある。これらは波多野重太郎の印である。波多野は、古書肆巌松堂の主で、1958(昭和 33)年没、享年 84。

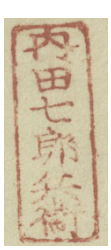
HW456『琉球聘使記』には、亀田鶯谷(かめだおうこく)の「稽古堂記」の蔵書印がある。亀田は 1807－1881 江戸後期から明治時代の儒者である。

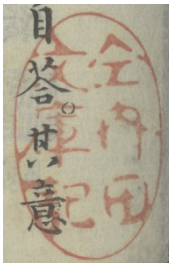


明治期の官僚であり古典籍の収集家の宍戸昌（ししどさかり）の蔵書印は、2 種類確認できた。例えば HW460-C1『琉球入貢紀略』は「宍戸氏文庫」(1651 番)とあり、押印の横に宍戸の付けた通しナンバーが付されている。HW468C『中山聘使畧』には、「宍戸昌蔵書記」の押印がある。

また HW460-C1『琉球入貢紀略』には、「紀伊小原八三郎源良直蔵書之記」という蔵書印もあった。これは小原良直（おはらよしなお）の蔵書印である。小原は江戸後期の国学者・医者。紀伊の人で通称八三郎、1858 年没。

HW483『琉球三省并三十六嶋之図』の表紙には、「新宮城書蔵」という印がある。表紙に蔵書印が押されているのは珍しい。これは紀伊藩附家老新宮城主水野家十代である水野忠央（みずのただなか）（1814～1865 年）の印である。水野は通称は藤四郎。丹鶴、黄菊寿園、鶴峰などと号した。





HW486『日本地誌略図問答』全 8 冊は、明治 9 年の下等小学校の地理の教科書である。国会図書館に準じて琉球大学附属図書館デジタルアーカイブでは『下等小学日本地誌略図問答』という名を付した。その HW486 には、4 種類の蔵書印があったが、そのうちの 3 種類は内田家という同一所有者と思われる印であった。HW486(1)『下等小学日本地誌略図問答　巻上　畿内東海道之部』には、表紙や扉に「内田七郎兵衛」の押印がある。内田は、1907 年に愛知県にできた知名銀行の頭取で、古文書などの収集で知られている人物である。次のページには同じく内田のものと思われる「全内田文庫記」の押印もあった。また、HW486(5)『下等小学日本地誌略図問答 巻之三　山陰山陽南海西海道之部』には「内恒」の押印もあった。これは「全内田文庫記」の印鑑にかぶせるようにして押印されている。これは、裏表紙の「内田恆助」というサインと同一人物であろう。内田恒助（うちだつねすけ）とは、江戸後期の肥後熊本藩士である。

HW492『薩州分国演説記』は、1752 年に書かれた書状の写本を有吉時陳が借用・書写したものである。有吉時陳は、熊本の有吉家別家の六代目。蔵書印は 2 種類押されている。正方形の「有吉家蔵」は書写した有吉時陳の家の印である。書籍の最後のページに押印されていた丸印の「時陳」は、書写した有吉時陳の個人印。有吉家は家老の家で、有吉家別家はその妾筋で、城代にあたる。

HW513『南島志』の表紙には、下半分が欠けているが「狩谷氏図書記」の印がある。狩野亨吉（かのうこうきち）の印である。第一高等学校校長、京都

帝大文科科長を歴任し、最高の知性をもちつつ市井の隠者として 1942 年に没した。書籍蒐集の猛烈さは有名で、個人としては最大の蔵書数を誇ったが、数度売り立てられ、残余は東北大学図書館に所蔵されている。また、この HW513 の冒頭には、八角形をした「椄斎」の押印があった。これは狩谷椄斎（かりやえきさい）（1775-1835 年、江戸後期の考証学者（今日の書誌学・文献学））の押印もあった。

HW784『中山伝信録』には印面「柴邦彦図書後帰阿波国文庫別蔵于江戸雀林荘之万巻楼」があった。これは、徳島藩蜂須賀家の蔵書印である。「柴氏家蔵図書」は柴野栗山の蔵書印である。また、阿波藩主蜂須賀家の蔵書印「阿波国文庫」は、30 点以上に押されていた。「残花書屋」は戸川浜雄の印である。

HW573『琉球詩録』には、「久保図書　5293」と久保猪之吉の押印がある。数字部分は手書きである。久保は 1939 年没、1903 年、京都帝国大学福岡医科大学（九州大学の前身）教授。医学博士、歌人・俳人。耳鼻咽喉科の権威として知られている。

琉球・沖縄に関係する蔵書印は、前出の蔵書印「中城御殿」(中城御殿)のほかに、いくつか確認できた。HW535『稿本 校本和漢琉年来記 真境名安興/手校書入本』は、沖縄学の研究者である真境名安興の私製本であるが、そこに「安興」「笑古蔵書」という真境名の蔵書印が押されている。HW470c-01『沖縄県地誌畧』には「関谷」という楕円形の押印があるが、これは沖縄県庁会計課職員であった関谷鉄太郎の印か。HW582-c1『琉球楽典 工工四 上巻』には、「新屋敷幸繁」「南方楽園社　地方文芸運動　鹿児島市上園町」という２つの押印があり、これは新屋敷幸繁(1899-198)の印である。新屋敷は沖縄県与那城町出身、国文学者、詩人。第七高等学校造士館教授、中央高等学校長、国際大学教授、副学長、名誉教授、沖縄大学教授、学長を歴任した。南方楽園社とは新屋敷の出版社の印である。新屋敷の蔵書印はほかに「新屋敷印」がある。HW678B『那覇糖商組合規約書』には、同社の「那覇糖商組合之印章」が押されている。組織の印は、宝玲文庫ではあまり見かけなかった。

２－３　古書店の印

旧蔵者の蔵書印のほかには、古書店の蔵書印も多く押されていた。古書店主の有名な蔵書印もあった。

特筆すべきは、「月明荘」の押印である。古書籍商反町弘文荘の反町茂雄が稀書善本と認めた書物にのみ押された印である。HW494(1) 『琉球往来』 上、HW494(2)『琉球往来』下、HW557『琉球百韻』、HW560『琉哥集（若樹文庫)』、HW735『御膳本草　(中城本)』に押印されていた。

〈「月明荘」1〉〈「月明荘」2〉〈「月明荘」3〉

「月明荘」の印面は３種類確認できた。HW494(1) 『琉球往来』 上、HW494(2)『琉球往来』下、HW560『琉哥集（若樹文庫)』には、１のタイプの押印があった。HW557『琉球

百韻』には２のタイプの押印があった。

２－４　所有者不明印・その他

所有者が分からなかった印面もある。「小笠原蔵書印」「杉浦文庫」「今井氏記」「武川」「端(万屋銀治郎)」「敬亭」「浅野氏蔵書印」「何仮南面白城」「朝水文庫」「朝水叢書」「内村蔵書」「本田氏図書印」「高山」「鴻」「宝」などである。これらの解明は今後の課題である。

また、蔵書印ではないが、書籍に押される印として、魁星印、古書店の押印などがある。前者は扉などに押されているものである。後者は本の見返しの裏に小さく押されているもので、通常は見えないが、紙をめくってここを見ることで、どの古書店が何冊セットで売ったものか、などの情報を得られることもある。

３　ホーレーの収集の状況

ホーレーの収集について述べる。ホーレーの収集熱は有名である。高額でも良いものは次々と買う。反町茂雄は、ホーレーの収集について「こんなに珍しい良い物が、こう安く買えるのは、千載一遇の好機、二度とないチャンス、と認識していられたんじゃないでしょうかね。(中略)そしてその信念の下に行動した。何でも良い物でさえあれば、躊躇なく、バリバリ買った」[10]と発言している。それだけを聞けば、ホーレーが良い品を金に糸目を付けずに自由に買いあさったかのような印象を受ける。

しかし当時、いい書籍はホーレーには売らない、という風潮もあったようである。一誠堂の酒井宇吉は、「ある時、(ホーレーが)「酒井君、君は一番いい本は私に見せないんですね」と私にいう。その通りなんですよ。私は古い良い本を、外国の人に売ることは、あんまり好きでない。(中略)それで自分が貴重と思う本、好きと思う本は、積極的にはホーレーさんにはお見せしなかった」[11]と述べている。反町もホーレーによい書籍を売らなかった[12]と述べている。

外国に日本の貴重書が流出するのを恐れたり、外国人への反感もあったのであろう。つまり、ホーレーが金を出せば必ず一級品の貴重書が手に入ったわけではないということである。それでも蔵書には一級品の古文書や珍書(例えば『琉球属話録』など)もあり、強い情熱を持って集めていたことがわかる。なお、ホーレーは古文書への書き込みはほとんどしない。読むよりも、コレクションに重きを置いていたからであろう。

４　まとめと課題

阪巻・宝玲文庫の蔵書印を調べたが、旧蔵者の情報が得られ、どこから来たコレクションなのかを知ることができたのはよい収穫であった。それにより、阪巻・宝玲文庫の質の高さを改めて感じた。蔵書印は紙面の都合上全てを紹介することができなかったのが残念であった。

課題としては、阪巻・宝玲文庫の全体像の確認である。ハワイ大学所蔵の書籍以外に、

天理大学の所蔵、その他ホーレーが手放したもの[13]などがある。しかし広範囲にわたるため調査はかなり困難であると思われる。

蔵書印はあるが持ち主が分からないものについて、今後も継続調査をしていく必要がある。これは私だけの問題ではなく、蔵書印研究の全体にかかる問題である。通常は古文書の蔵書印は現地で本物を確認しないとわからないことであるが、阪巻・宝玲文庫がデジタルアーカイブで全頁が公開されていることで、今後の研究がさらに進んでいくことを期待したい。

---

[1] ハワイ大学ホームページに全リストが掲載されている。
http://www.hawaii.edu/asiaref/okinawa/collections/sakamaki_hawley/
[2]横山學「宝玲文庫の蔵書印について」
http://www.hawaii.edu/asiaref/japan/special/sakamaki/hwzoshotxt.htm
[3] HW442『寛政二年八年琉球人来聘』より。
[4] HW443『宝永七庚寅年琉球国来聘使日記』より。
[5] HW446『琉球人来朝記』より。
[6] ハワイ大学マノア校図書館ホームページ
http://www.hawaii.edu/asiaref/japan/special/sakamaki/hwzoshoin.htm
[7] 横山學『書物に魅せられた英国人―フランク・ホーレーと日本文化』吉川弘文館、2003.10、p 8。
[8] 前掲　横山學「宝玲文庫の蔵書印について」
[9] 高橋章則「失われた曳尾堂文庫のゆくえ　―江戸末・明治　東北農村の文庫」　藤善眞澄編『関西大学東西学術研究所創立 50 周年記念国際シンポジウム'01 報告書　東と西の文化交流』平成 16 年 3 月、関西大学出版部、p39
[10] 反町茂雄『紙魚の昔がたり』昭和篇　八木書店、昭和 62 年 2 月　p 63
[11]反町茂雄『紙魚の昔がたり』昭和篇　八木書店、昭和 62 年 2 月　p 250-251
[12]反町茂雄『紙魚の昔がたり』昭和篇　八木書店、昭和 62 年 2 月　p 251
[13] ホーレーが最も多く書籍を手放したのは、昭和 36 年「ホーレー文庫蔵書展観入札」。戦後の三大売立のひとつといわれる。昭和 20 年代にとても割安に買ったものを 30 年代に売ればどれも相当に利を生んだという。